

第三回シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」

巢鴨の賑わいの原点をさぐる―江戸の拡大と巢鴨地域―

日時 二〇〇七年二月一日(土) 一五:〇〇～一七:三〇

会場 豊島区立勤労福祉会館六階大会議室

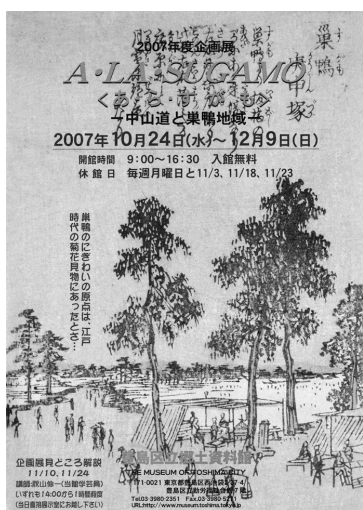
開会挨拶	飯島 眞	3
趣旨説明	小林 克	4
報告① 企画展「A・L・A・SUGAMO(あ・ら・すがも)―中山道と巢鴨地域―」の ねらいとみどころ	秋山伸一	6
報告② 巢鴨町を掘り起こす	成田涼子	9
報告③ 近世巢鴨地域の景観研究―幕末の政変と絡めて―	高尾善希	13
コメント① 江戸における場末地域研究の進展のために	市川寛明	17
コメント② 巢鴨町の社会―その成果によせて―	岩淵令治	20
質疑応答	小林(司会)＋秋山＋成田＋高尾	24
江戸東京フォーラム話題一覧他		27

フォーラム趣旨

近世から近代への流れを一貫した視点で捉えようと、「江戸東京学」が生まれました。それは東京という地域を深く知る、一種の地域学でもあります。同時に、東京には異なる性格をもつ多くの地域があり、地域の資料館等では熱心な活動が展開され、優れた学芸員等による膨大な研究が蓄積されています。そこで、江戸東京フォーラムでは、「東京の地域学を掘り起こす」というテーマのもとに、シリーズで地域の資料館等の活動を取り上げていきます。

第三回は、おばあちゃん原宿として、賑わう豊島区巢鴨地域に光をあてます。巢鴨地域は江戸の北側に位置し、中山道沿いに江戸時代前期から町場化が進みました。巢鴨町と巢鴨真性寺門は、延享二（二七四）年に大都市江戸の一部に組み込まれました。一九世紀には、中山道沿いの植木屋たちによる菊づくりが人気を呼び、見客で賑わう時期もみられました。フォーラムでは、こうした歴史を有する巢鴨地域

について、絵画・絵図類・文献資料研究、および埋蔵文化財発掘調査の両面から検討をします。その際、近年明らかになった幕末期の巢鴨町軒別図からの考察も加え、江戸に展開する他町との類似点や相違点等についても抽出していきたいと考えています。豊島区立郷土資料館の企画展「LA・SUGAMO（あ・ら・すがも）——中山道と巢鴨地域——」と連携し、豊島区と共催します。



2007年度企画展
A・L・A・SUGAMO
くさくさ・あざな・あざな
中山道と巢鴨地域
2007年10月24日(水)～11月9日(日)
開館時間 9:00～16:30 入館無料
休館日 毎週月曜日と11/3、11/18、11/23
展覧の輪をのびるのは、江戸
展覧の輪をのびるのは、江戸
企画展覧とご一緒
11/10、11/24
講座・講演会等—(1)開学記念
11/10(水)14:00から1開館後
11/24(日)10:00から1開館後
TEL:03-5863-5151 FAX:03-5863-5152
URL: <http://www.museum.tokyo.ac.jp>

開会挨拶

豊島区立郷土資料館
飯島眞

住宅総合研究財団および豊島区の共催により、江戸東京フォーラムにお越しいただき、ありがとうございます。

本日は、歴史の研究者・愛好者の方々、建築関係者、地元巣鴨地域で活躍されている方々、および商店街の会長さんもお見えです。また、遠くは神戸市などからもいらしてあります。いろいろな方にお集まりいただき感謝しております。

テーマ「東京の地域学を掘り起こす」の第三番目に豊島区巣鴨を選んいただきましたこと、住宅総合研究財団の皆さまに厚く御礼を申し上げます。また、この機会を通じて、豊島区関係の学芸員一同、今後とも精進を続けていきたいと思っていますので、よろしく願っています。

実は、私は二〇歳ぐらいまで板橋区の板橋本町というところに住んでいました。子供のころは、とげぬき地蔵さんに毎月のよ

うにお参りに来ました。お線香の煙をかけると頭がよくなると言われて、やったのですが、どうも、その効果は人によって違うということもあるようです。

本日の江戸東京フォーラムが実り多きものになりますように、司会者、パネラー、今日会場にお越しのお客様の皆さまによりしくお願い申し上げます、挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

いじま・まこと

一九七一年入区。選挙管理委員会事務局、目白図書館などを経て、二〇〇六年四月より現職。



趣旨説明

東京都歴史文化財団

小林克



皆さん、こんにちは。本日司会を仰せつかりました小林克と申します。

江戸東京フォーラムも、すでに一七六回を数えております。これまで、第一線で活躍されているさまざまな分野の方々が研究会で発表されました。

二〇〇〇年には、このフォーラムの基本的な課題として四つの柱をつくりました。その柱のうちの一つに『地域研究』を掘り下げよう」というテーマを設定しております。

そもそも、この江戸東京フォーラムは、故小木新造先生が今年途中まで委員長をされていました。残念ながら、小木先生は今年度お亡くなりになってしまったわけでは

が、そういった中で、江戸東京学、さらには江戸東京フォーラムとしましても、地域研究を掘り下げていこうということを一つの大きな課題にしたわけです。

「地域学を掘り起こす」は昨年度から二回、各区の企画展とタイアップしたテーマで開催されております。

第一回目は、今年二月二十四日に荒川区の荒川ふるさと文化館と、「杉田玄白と小塚原の仕置場」というテーマで現地見学を行ない、さらに、さまざまな研究発表をしてもらいました。また、展覧会の解説も行ってもらいました。

第二回目は、三月一八日に文京区の文京ふるさと歴史館とタイアップし、学芸員の方の「文京・まち再発見」という発表と、「近代建築―街角の造形デザイン―」をテーマに実際に町を歩くという形でのフォーラムを行ないました。

今回は三回目としまして、「巢鴨の賑わいとその原点をつさぐる」というフォーラムとなります。

さて、「江戸東京学」は、小木新造先生によつて約二〇年前に提唱されたわけですが、この江戸東京学というのは、東京とい

う地域を掘り下げる、東京という地域の一種の「地域学」でもあります。同時に、東京にはさまざまな地域が存在しますので、そうした個別地域の性格をきちんと研究していこうということも視野に入っているわけです。地域をきちんと研究することによつて江戸東京学もより深みを増し、さらに進展が望まれるだろうという考えです。

江戸東京学のもう一つの特徴として、「学際的研究」があります。これまでのフォーラムでは、さまざまな分野の第一線の研究者が発表されています。一つの分野だけではなく、学際的に、いろいろな分野の方がコメントをし、議論をすることが、江戸東京フォーラムの特徴としてあつたわけです。そうした経緯の中から、学際的研究、さらに地域を掘り下げる研究をきちんとやっていこうということが、このフォーラムの一つのテーマになりました。各区市町村、特に区の郷土資料館等がやっておられるさまざまな素晴らしい研究があるので、それを取り上げていきたいということから、今回のテーマである巢鴨地域へとつながってきたわけです。

当然ですが、江戸東京学として「地域学」

をテーマとして取り上げる以前から、各区の中には先進的にそういう地道な調査研究に取り組んだところがいくつもありました。特に豊島区は、その最たるところかと思えます。発掘調査だけではなくて、さまざまな民俗調査、文献の調査といったものを、もう三〇年近く前からきちんと行ってきたているのです。そうした成果が、カタログ(図録)になっており、今回の豊島区郷土資料館の展覧会にも反映されていると思います。

本日は、まずこの展覧会を企画されました学芸員の秋山伸一氏に「A・L・A・SUGAMO〈あ・ら・すがも〉」展の企画趣旨について発表をいただき、また、巣鴨町の発掘に長年関わっておられます豊島区教育委員会の成田涼子氏に巣鴨遺跡発掘の話をしていただきます。さらに、高尾善希氏から「近世巣鴨地域の景観研究」としまし

て、数年前に新たに見つかりました絵図の分析結果について報告を受けたいと思っております。その後、コメンテーターとして、江戸東京博物館都市歴史研究室の市川寛明氏と、国立歴史民俗博物館の岩淵令治氏にコメントをお願いしております。

じつは、コメンテーターの方には、一週間ほど前に、すでに発表の概容を聞いていただいております。そのうえで、どのようなコメントをしていただくかを考えていただきました。

江戸東京学としましても、地域研究というものをきちんと取り上げ、その地域と地域を比較する中でより実践的、実証的な江戸東京学を目指そうと考えています。市川さん、岩淵さんは、それぞれ四谷の塩町や文京区のほうでも、地域研究、文献史学からの研究、考古学の成果と相まった研究も行なっております。そうした中で、この豊

島区巣鴨地域、江戸の周辺地域という位置づけができるかと思えます。コメンテーターの方々には、そこでの研究についての分析、コメントをいただきたいと思っております。

本日は、お三方に発表をしてもらい、それから小休止を入れます。その小休止の時点で何か質問票があれば、後ろの受付のところに入れてください。残念ながら、時間も限られておりますので、その中から取捨選択して、後半の質疑応答のときに取り上げさせていただきますと思っております。

こばやし・かつ

一九五九年新潟県塩沢町生まれ。日本大学史学専攻修了。一九八九年より学芸員として江戸東京博物館準備に携わる。江戸東京博物館オリジナルグッズ「今戸焼」など四シリーズを制作。共著に『掘り出された都市——日蘭出土資料の比較から』ほか。『昔のくらしの道具事典』で産経児童出版文化賞大賞受賞。

企画展「A・LA・SUGAMO
〈あ・ら・すがも〉—中山道と巢鴨地域—
のねらいとまじり

豊島区立郷土資料館

秋山伸一



企画展「A・LA・SUGAMO〈あ・ら・すがも〉」(展示期間：二〇〇七年一〇月二四日～二〇〇七年二月九日)を担当いたしました、秋山と申します。今回のテーマである「巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—」について、皆さんがなるべく具体的にイメージできるように、この企画展でのねらいや展示のストーリーについての解説を行ない、あとに控えている成田さんと高尾さんの報告に繋がりたいと思っています。

— 豊島区の中かの巢鴨地域 —

図1は、現在の豊島区を構成する旧村七

ヶ村を示した地図です。旧村というのは江戸時代の村という意味ですが、この旧村七ヶ村が近代以降、何回かの合併を経まして、一九三二昭和七年に豊島区となり、現在に至っています。旧巢鴨村部分というのは、豊島区の東側に位置していることがわかります。ちょうど巢鴨駅から西巢鴨駅にかけてが白山通りにあたりますので、それよりもやや南側に位置するのが、今日の議論の中心となる旧中山道の道筋になります。

また、「旧江戸朱引内図」図2を見ていただくと、江戸という都市の中での巢鴨の位置が分かると思います。江戸城から見てやや西北の方向、ちょうど黒引線の内側に「巢鴨村」と書いてある部分がそれです。この巢鴨村の中の巢鴨町の部分のみが、延享二年、町奉行支配になっていくわけです。

— 展示のねらい —

さて、現在巢鴨といえますと、一般には「おばあちゃん原宿」とげぬき地蔵「地藏通り商店街」といったものをイメージする方が多いと思います。これは豊島区に住されている方も同様で、JR巢鴨駅周辺を巢鴨地域と認識されている方が多いの

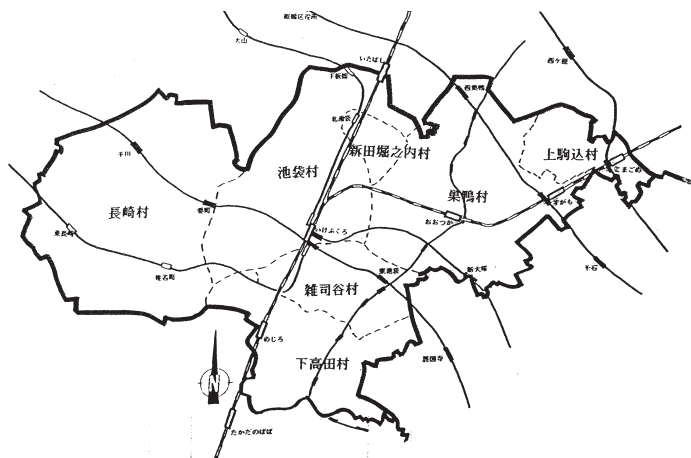


図1 旧村七ヶ村の地図 作成：郷土資料館

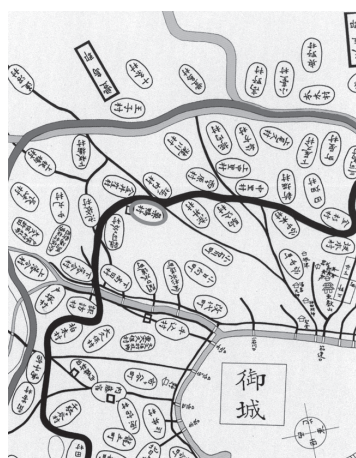


図2 旧江戸朱印図(部分) 所蔵：東京都公文書館

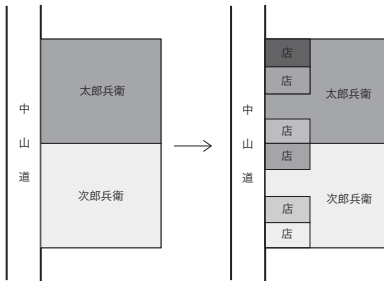


図3 巢鴨村の町場化の過程概念図

作成：秋山

①中山道沿いに、百姓である太郎兵衛と次郎兵衛が江戸時代の早い時期から居住。②中山道沿いの人通りがだんだん多くなり、町場化していく。③道に面した部分を店として貸し出し、店賃収入を得るようになる。

ではないでしょうか。このことは別に間違っているのではないのですが、その一方で、昭和ひと桁ぐらいの世代の方に聞いてみますと、いちばん認知度の高いのが、「巢鴨プリズン／巢鴨刑務所」なのです。

皆さんご存じのように、巢鴨プリズン跡地は、現在東池袋のサンシャインシティになっていきます。確かに、江戸時代まで遡りますと、現在のサンシャインシティの場所は巢鴨村の村域に含まれます。つまり、江戸時代の巢鴨村の範囲というのは、現在多くの方がイメージする巢鴨の範囲よりも一回りか二回り、特に南側に広い。そして、巢鴨村の中の北側に位置する中山道沿いに細長く展開していたのが巢鴨町なのだと

いうことです。逆に言うと、この巢鴨町以外は、幕末まで巢鴨村だったということですから。その辺を今回の展示で知っていただければと思っています。

次に、江戸や江戸の近郊の研究の中で、江戸時代の巢鴨というのは植木屋の町だったという、ちょっとした通説があります。しかし、あとでお話しされる高尾さんの研究成果からも明らかのように、文久元年（二八六）の「巢鴨町軒別絵図」に記される二三八軒のうち、植木屋というのは二〇軒しかありません。つまり、八パーセントにすぎないのです。二〇軒でもほかの町に比べれば多いと言えますが、ここで確認しておきたいのは、巢鴨町が決して植木屋だらけの町ではなかったということです。そのこともあり、今回の企画展の中では、あえて植木屋の存在を前面に出さない江戸時代の巢鴨地域の展示を心がけました。

また、もともとあった巢鴨村の一部が町場化していく過程で、次のような変遷を経るのではないかと考えました^{図3}。①中山道沿いに、百姓である太郎兵衛さんと次郎兵衛さんが江戸時代の早い時期から居住していた。②中山道沿いの巢鴨町の部分がだ

んだん人通りが多くなり、町場化していった。③二人は道に面した部分を店として貸し出し、店賃収入を得るようになった。

後発の街道沿いの町場の展開方法は、このようなものではなかったかと考えています。日本橋や神田といった江戸のど真ん中の町場とは異なる、場末の町の特徴ではないかと考えています。この街道沿いの町場の展開のあり方については、数年前に発行された豊島区の埋蔵文化財の報告書の中で、すでに指摘されています。

以上、展示のねらいをお話ししましたが、これを踏まえて、展示のストーリーをお話したいと思えます。これを念頭に置きながら、休憩時間やフォーラムが終わったあとに、もう一度企画展を見ていただきますとまた違った見方ができるのではないかと思います。

— 展示のストーリー —

まず一番目として、巢鴨地域は江戸の北西に位置する農村でした。村の北東部には中山道が通り、巢鴨庚申塚には「立場（たてば）」が置かれていました。立場というのは、宿場とは違う、宿泊施設の置かれてい

ない休憩所の意味です。

二番目に、江戸時代の前半から中山道沿いにはすでに町並みが続いてきたようです。そして、巢鴨町と巢鴨真性寺門前の二つについては、一七四五(延享二年)年には、大都市江戸の一部に組み込まれたということとです。つまり、先ほど言いました「朱引内図」の中の黒引線の内側に一七四五年の段階で入ったということになります。

三番目。江戸の一部にはなったものの、巢鴨町というのは板橋宿にごく近い町場であり、旅人が足を留めることなく素通りする町だったため、当初は町として賑わっているような状態ではなかったのではないかと思います。

次に、四番目。町として繁栄していくためには、町へ多くの人を呼び込む必要があります。つまり、町に居住する植木屋たちによる菊作りでした。その菊作りが、一九世紀になって巢鴨町をはじめとする地域で大ブームを引き起こし、三回にわたる菊見ブームにつながっていった。

最後に、これは現在につなげていくためのコメントなのですが、現在の巢鴨地蔵通

りの賑わいというのは江戸時代後半以降の菊見客にその原点を求めてもいいのかもしれないということです。

ここで、四番目について補足しないといけないのですが、『遊歴雑記』(一八二九年)という紀行文の中には、江戸時代中期の元文・寛保年間(一七三六～四三)から巢鴨では菊作りが行なわれていたと書かれています。つまり、長年にわたって巢鴨町の植木屋による創意工夫が行なわれた結果が、菊見ブームが起こったときの代表的な見せ方である形づくりに行き着いたという考え方です。地域の活性化というのは現在も日本のあちこちで叫ばれています。これは、その地域の居住者にとっては今現在固有の問題ではなくて、すでに江戸時代の段階でもう課題としてあったのではないかと。つまり、こういう地域の活性化の問題というのは永遠の課題であって、その地域に居住する方々が追求していくテーマなのだろうというところで展示を終わらせています。繰り返しになりますが、今のストーリーを念頭に私は展示を構成していますので、それを踏まえてみなさんに展示を見ていただくと、また別な見方ができるのかなと思います。

残された課題

実は、今回の展示の中では、豊島区西巢鴨二丁目に所在する大日堂に関してはまったく取り上げていないのです。こうした地元に残された小規模な堂や石造物などについても考えていかないと、巢鴨村がなぜ芝の増上寺の寺領となったのかという疑問が残ります。私の中では、まだ、その根本的な解決には至っていないので、その辺の研究を進めていかないといけないだろうと思っています。

それから、江戸の中心部とは異なる、巢鴨などのやや離れた町場の事例を収集していきながら研究を厚くしていく、蓄積していくということが必要なのではないかと思っています。あとの成田さんと高尾さんの報告に果たしてつながるかにはまだ不安ですが、報告を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

あきやま・しんいち

立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。一九九二年に学芸員として豊島区入区。郷土資料館勤務、文化財係勤務を経て、二〇〇二年より再び郷土資料館勤務。現在に至る。

巢鴨町を掘りおこす

豊島区教育委員会
成田涼子



私は豊島区教育委員会の文化財係というところで遺跡の発掘調査を主に担当しています。もう一〇年ぐらいになります。

今日は、「巢鴨町を掘りおこす」というテーマでお話をします。ただ掘るだけではなくて、おこすというところまで決着をつけたいと思っています。

―― 巢鴨遺跡と発掘調査 ――

巢鴨町には巢鴨遺跡というものがありません。現在の巢鴨三丁目、四丁目のあたりがそうです。巢鴨遺跡の中には、巢鴨町と、巢鴨村と、巢鴨村の中に成立した武家地の三種類があります。そのなかで、今日は巢鴨町について主にお話したいと思っています。

ます。

まずは、巢鴨町の発掘調査について見ていきましょう。発掘調査はビルや住宅の建て替え工事に伴って行なっているもので、それぞれの建物の単位でしかできません。この写真のように、大変狭い。こういう具合に、ちよつとずつ掘っていつて全体を探ろうという活動を続けています。

遺跡からは「遺構」と「遺物」が出てきます。遺構というのは、穴です。建物の跡、溝の跡、井戸、地下室、ごみ穴などが出てきます。遺物としては、江戸時代の場合には、陶磁器、土器といった、生活していたときに使った道具のうち腐らなかつたものが出てきます。その分析を積み重ねることで、ある程度、そこで住んだ人の生活が復元できるわけです。

―― 遺跡からわかる生業 ――

生業が明らかにわかる一例として、料理屋と植木屋の遺跡を比べた表を見てみましょう。「図1」。上三つは、植木屋の斎田弥三郎家があつたであろう場所を掘ったときに出てきた遺物群の分析です。下二つは、雑司が谷の鬼子母神門前の料理屋から出てき

た遺物群の分析です。見比べると明らかに、斎田弥三郎家のあつた場所では植木鉢の出土が多い。普通の人の生活では考えられない数が出てきました。それに対して、雑司が谷では植木鉢が1%にも満たない。このことは、斎田弥三郎家のあつた場所が、植木屋であつたことの状態証拠となると考えています。

巢鴨で出てくるタイプの植木鉢は瓦質で、隅田川沿岸で焼かれていたと言われています。全体的にちよつと黒っぽくて、底に穴があります。この植木鉢の特徴は、焼く前に穴をあけてあるということです。こういうものが飲食器よりもうんと多く出てきています。

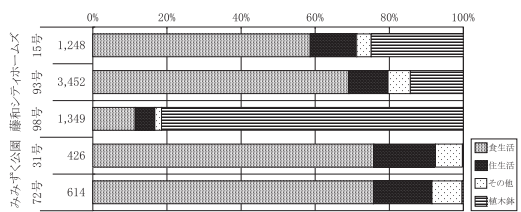


図1 植木屋(巢鴨)と料理屋(雑司ヶ谷)の器種組成比較
作成: 成田涼子

これは植栽痕と呼ばれる遺構です。「写真1」。植木を植えた跡、あるいは抜いた跡だろうと考えられています。このように根っこの跡がボコボコあい



写真1 藤和シティホームズ築鴨地区(中山道から撮影)

ているものと、きちんと掘った跡が見られるものがあります。植栽痕が出てくるのは植木屋の特徴です。

では次に、食器類がたくさん出てきたところを見てみましょう。ここは今でも「桃花源」という中華料理屋さんがあるところですよ。おそらく江戸時代からずっと食べ物屋さんをやっているような場所なのでしょう。お茶を飲んだりする土瓶、お茶碗、お皿などが非常にたくさん出てきました。

ここで特徴的なのは、八角形の鉢です写真2・右上。中に障子と草木が描いてあります。このタイプのものが何十個も出てきました。一般家庭の食器のあり方とはまったく違います。ですから、この場所は料理屋だったのではないかと発掘調査の結果考え

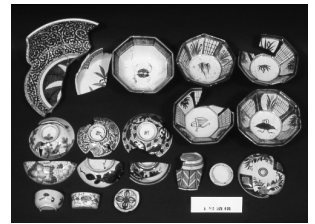


写真2 桃花源ビル・友泉巢鴨ビル地区出土の飲食器

ています。

これは、ハーモニーハイツ地区の調査で見つかった鍛冶炉の跡です写真3。炉床のいちばん下のところの地面が焼け焦げて、赤い焦土が生成されています。遺物としては、「羽口」が出てきました。炉に風を送って火を強く起こすためのものです。炉の中に入る先端の部分は高温で溶けてしまいうので、どんどん使い捨てにします。ですから、業務用に羽口を使ったところでは、猛烈な数が出てくるわけです。ある種、産業廃棄物のような位置づけです。これが何千点か出てきました。

ほかに、鉄滓(鉄かす)などがあります。炉の底に出てくる生成物です。これも産業廃棄物の一種です。



写真3 ハーモニーハイツ地区の鍛冶炉跡
すべて提供：豊島区教育委員会

それから、砥石です。何に使ったか分からないのですが、どうも鉄製品をつくったあとに何かを研いでいたようです。球状石製品と呼んでいるものもありません。これは何に使われたかは分かっています。大きさは五センチくらいで、小さいものは、サトイモの面取りをしたような感じのものが二〇個、三〇個と出てきます。これは、巢鴨のほかの地区ではなかなか出てこないのです、この地区の生業にかかわる非常に独特な遺物であると考えています。

生業を示すものとは違いますが、中山道に面した真性寺門前町では、輪宝の模様や房の付いた扇の紋がある瓦が出てきました。町家で瓦はそんなにたくさん出てきません。それに、真性寺さんは今もこの扇の紋を使っています。また、真性寺さんの境内を調査したときには、輪宝が出てきました。門前町になる前に真性寺が中山道際まで一筆二区画の田畑・土地で持っていたのではないかと考える証拠になりました。門前からは、こういったちよつと特異な遺物が出てきます。

—— 巢鴨町屋の空間利用 ——

このようにして、遺物や遺構から、地点の生業を特定していくという作業を延々とやっていくわけですが、その上で、さらに、それぞれの場所によって敷地の中をどう使っているのかということを考えていきます。

ハーモニーハイツ地区の南側は、中山道に面しています。この地区を掘った一年ぐらい後に、裏手のルミエール巢鴨地区を掘りました。ここは今、別のマンションが建っています。それから、ハーモニーハイ

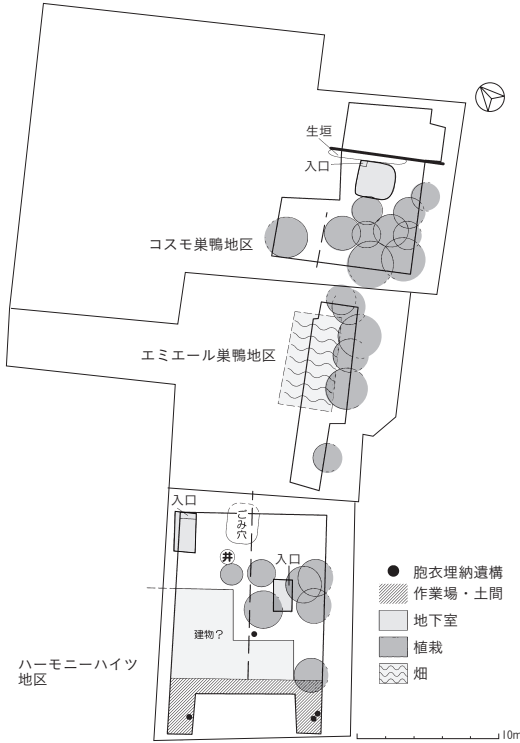


図2 鍛冶屋の空間利用模式図 作成：成田涼子

ツを掘る五年ぐらい前に、コスモ巢鴨地区を掘っています。こうやって三つばらばらに掘った地点が、元が一つの敷地だったと考えるに足る証拠が出てきました。

ハーモニーハイツの道路にいちばん近い側から出た遺物の破片と、二軒隣のコスモ巢鴨地区から出た遺物がくつついたのです。このことによって、もとは一つの場所だったと考えるのが自然だろうという結論に至ったわけです。

ハーモニーハイツ地区は、中山道に面した敷地の表空間になります。先ほどの鍛冶の跡はここ（道路に面した地点）にあります。

つまり、道路からすぐ見える所で、火を轟々と起こして鍛冶の作業をしていたというところがわかっていきます。

やや奥のほうでも二、三個炉の跡が出てきました。さらに

奥のほうに行きますと、大きな地下室が三個並んであります。それから、井戸もあります。

ルミエール巢鴨地区では地下室などは出てきていません。調査区が非常に小さかったので、よくわからないのですが、これもどうも畑の跡のようです。この丸いのは植栽痕です。

さらに奥に入ったコスモ巢鴨地区には地下室があります。この辺のくぼみは全部植物が植わっていた跡だと考えています。

この三カ所の発掘結果を組み立てて復元したのが、この図になります(図2)。いちばん下が中山道、表側です。そこに、どうも建物があったということが分かりました。そして、先ほど説明したように、地下室や井戸のある裏庭のような空間が展開し、さらに裏には畑があったり、木が植わっていて、いちばん奥には大きな地下室がありました。そして浅い生垣があって、そこから先がどうも全然違う空間になるらしいということがわかっていきます。

遺構の配置図だけを見ると、こここの生垣を境にして、表側とこちら側ではまったく状況が違うのです。この生垣より奥のほう

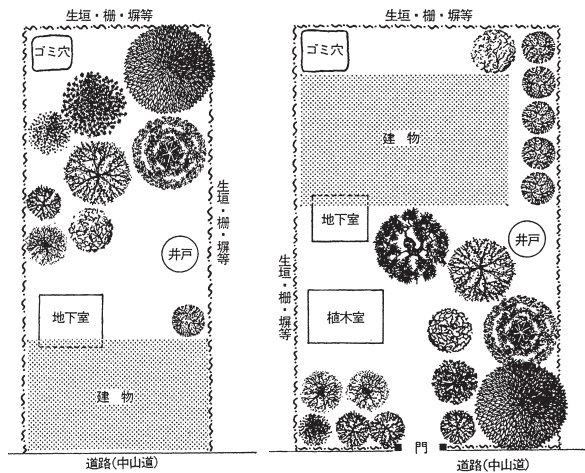


図3 町屋(左)と植木屋(右)の模式図 作成：成田涼子

に行くくと、もう人間が掘った痕跡というのはほとんどなくて、立ち枯れた植物の跡がポコンポコンと出てくるだけになってしまっています。こういった作業から、ここまでが一つの巢鴨町の町屋の空間として機能していた範囲だろうと復元できたわけです。

ちなみに、ハーモニーハイツ地区と同じ巢鴨町上組の鍛冶屋があった場所を調査したことがありますが、ここにもいちばん奥には畑の跡があります。これによって、鍛冶屋ではあるけれども畑もするというよう

な生活のあり方を想起できるわけです。

この図は、巢鴨町の町屋が、いわゆる街道沿いで建物を持ち、営業している町屋のようなものではないかということで作った模式図です。表側が中山道で、建物がある、井戸とか地下室がある裏庭がある。樹木が立っていて、ごみを捨てる場所もある。これに先ほどの調査の成果を足すと、どこかに畑を伴うというのが一つのパターンとして考えられます。

これがさらに模式図を発展させたものです。先ほど見ていただいた藤和シテイホームズ巢鴨地区は、表に植木だまりがあって、後ろに建物が建つというイメージでした。しかし、巢鴨の場合は、先ほど秋山さんがおっしゃいましたが、表の部分を切り離して貸していくことがあったようです。

このパターンを抽出したのは、道路から少し入った庭と思われた場所を掘ったときに、料理屋と推測できる遺物群が出てきたからです。植木屋の敷地に料理屋の跡があるというのはどういうことだろうか突き詰めて考えた結果、植木屋の前で料理屋を営むということがあったのではないかと推論したのです。この推論が的はずれでない

ことは、あとで高尾さんがお話になる「軒別絵図」を見ることでわかりました。

「軒別絵図」をみると、例えば「植木屋家持三九郎」と書いてあります。つまり、植木屋三九郎の土地で、七右衛門が飯屋をやっているという状況がわかるわけです。ほかに、四郎左衛門という有名な植木屋の家持の店で飯屋を営業していることなどが絵図から読み取れます。

これは日本橋中央区一町目を掘った調査の跡です。四角い土蔵が、細長い間口一〇メートルくらいの所に密集しています。どこまで行っても四角い構造物がビシッと立ち並んでいるのがわかると思います。

これに比較すると、巢鴨というのは表には建物があるのですが、裏に行くとも家庭菜園があるような景観になってしまっています。同じ「町屋」でも、かなり趣が異なることがわかります。このあたりが、巢鴨が村の中に成立した、街道沿いの町だということと密接に関わっていると思っています。

なりた・りょうこ
早稲田大学修士課程修了。豊島区教育委員会学芸員

近世巢鴨地域の景観研究

—幕末の政変と絡めて—

東京都公文書館

高尾善希



私はもともと、江戸近郊の村落史が専門です。江戸そのもの、都市史には長らく門外漢であったのですが、東京都公文書館に職を得たことがきっかけで、だんだんと江戸について論考も書くようになりまして。今回お話する巢鴨の話も、その中の一つというわけです。

私は巢鴨という土地にはあまり縁はなかったのですが、たまたま今回お話する絵図を見つけたために、巢鴨の皆さんとも交流を深めることができました。

今回のお話の目的は二つです。一つ目の目的は、「巢鴨町軒別絵図」(文久元年・国立国会図書館蔵)と「境内作事絵図面」(文久三年・国

立国会図書館蔵)という二つの絵図史料の紹介です。両方とも町奉行所の文書、旧幕府引継書の中にあつたものです。

二つ目の目的は、この二つの図を利用し、景観を復元しようということ。景観復元というのは、現在の地図と昔の絵図とを近づけてみようということです。

景観というのは時にしたがって移ろうものです。江戸時代も例外ではありません。明治時代も難しくて、明治期の絵図史料を比較してみたのですが、数年でずいぶん様変わりしてしまいました。

そこで、文久元年から文久三年という、三年の短いスパンで、それをモデルケースとして復元をしようということを考えました。幕末の政変によつて作られたこの二つの絵図を同時に出して、その課題に迫りたいと思っています。

— 江戸の巢鴨町 —

巢鴨町は増上寺領で、宝永期から享保期にかけて、徐々に百姓町屋が形成されます。これはもともと巢鴨村だった所に町がだんだん出てきたということです。一七三七(元文二年)に町屋起立が公許され、

一七四五(延享二年)からは町奉行と増上寺領の両属支配になります。

江戸から遠いほうから順番に、上組・上中組・下中組・下組という四つの組に分かれています。上組と上中組の途中までは、中山道をはさんで両側町、つまり左右両方が町になっています。上中組の途中から片側が武家地、片方が町方ということになります。そのまま文京区との境まで巢鴨町は続いています。

巢鴨には江戸六地蔵の一つがあります。なぜ、地蔵があるかというと、それは江戸の端にあるからです。地蔵というのは境界の守り神と言われています。巢鴨をはじめとして、江戸中に六カ所の地蔵が立っているわけです。こういうところが、巢鴨が江戸の境界であるということがわかります。

巢鴨を含め、江戸北郊地域というのは、行楽地として名所がたくさんあります。巢鴨、染井、駒込あたりはそういう所が多い。「武江年表」を見てみると、文化九年には、菊の造物で人物鳥獣を表現し、見物客を集めたということが書いてあります。また、弘化元年は、日蓮の御難のさま蒙古退治の体などを菊の様子で作ったということが書

かれています。巢鴨と言えば菊作りということで、当時非常に有名だったようです。今回ご紹介する絵図では、植木屋以外の様相も出てきます。

さて、巢鴨を考えるにあたって、面白い人物を一人ご紹介したいと思います。内山長太郎という人物です。「巢鴨花太閤」——花で出世した豊臣秀吉と言われた人です。立志伝中の人物と言っても過言ではないと思われまます。

内山は文化元年に巢鴨の地に生まれます。父親が笹や味噌澆を商う家でした。彼は小さいころから植木が好きでした。幼くして植木屋を志し、一五歳から唐辛子の苗の行商に行きます。ある時父親に呼ばれ、「お前も一五歳になったのだから、自分で身体を使って働け。いつまでも親のすねをかじっているんじゃない」と言われてこういう行商をするようになったそうです。

彼が行商してどこへ行ったかというところ、吉原です。唐辛子の苗というのは賞玩用の苗で、これをついで売る。遊女たちにはなかなか人気者だったらしく、好評を博します。また、上野で行商をしていたとき、越中富山藩主の世子、前田利保の知遇を得

て意気投合し、それがきっかけで大名とのつながりが出来、さらに植木の研究に励んだようです。

面白いのは、『盆栽雅報』村田利右衛門編纂、盆栽同好会刊、明治四一年)に載っている話なのですが、彼が立身出世となるきっかけを作ったのは、天保飢饉だということです。江戸の物価が騰貴したときに、長太郎が川越在からかぼちやを仕入れて江戸市中へ売り、それで財をなし、植木屋として大成したということです。江戸の端、村落部と非常に近い江戸市外に生まれた人物であり、うまく土地条件を利用して出世したということが言えます。こういうところから、巢鴨の社会的な位置を見て取ることができると思います。

—— 巢鴨町軒別絵図 ——

さて、それではいよいよ、「巢鴨町軒別絵図」の紹介に入ります。例えば、江戸の切絵図などを見ても巢鴨町、あるいは巢鴨町上組とか、そういったことが書かれているだけで、どこに誰が住んでいるのかはわかりません。もちろんお寺や武家地は「寛永寺」「大岡越前守」などと書かれています。町方については詳しい土地利用のあり様が書

かれておりません。ですので、今回のように、絵図史料を見つけてこない、その町の内部というは詳しくわからないのです。

「巢鴨町軒別絵図」が見つかったのは、和宮降嫁に関する書類の中でした。なぜこのようなところから史料が見つかったかというと、和宮御下向の行列というのは大変数が多かったことに原因があります。もともと宿場町である板橋宿に人を泊まらせるはずだったので、行列の人数が多くて泊まり切れなかった。そこで、本来は宿泊施設ではない巢鴨町も急遽、その行列の宿泊地として利用しようということになる。そのため、巢鴨町の名主に作成させた絵図が「巢鴨町軒別絵図」なのです。つまり、この絵図は和宮降嫁の行列が偶然通りかかったことよって作成された、まさに偶然の産物と言えます。

これには雛形があつて、何屋何兵衛という記載で町の様子を書き記せとの命令でしたが、実際に作成された絵図は、雛形よりももっと詳しい絵図でした。おそらく粗相があつてはいけないという事で、地元の方が気をきかせたのでしょう。そのおかげで私たちはこのような情報を知ることが

(中山道)
京方

番号	職業	所持関係	名前	備考
1	—	—	(自身番屋)	—
2	飼養屋	市兵衛地借	久次郎	○
3	馬持	市兵衛地借	初太郎	○
4	菓子屋	市兵衛地借	熊藏	○
5	穀物屋	市兵衛地借	平助	○
6	穀物屋	家持	平助	○
7	—	市兵衛店	専助	—
8	下駄屋	市兵衛店	仙之助	—
9	白屋渡世	市兵衛店	新次郎	—
10	湯屋	家主	伊右衛門	○
11	水菓子屋	久兵衛店	伝次郎	○
12	春米屋	久兵衛店	忠蔵	○
13	—	家主	権兵衛	○
14	—	—	(明店)	—
15	日雇渡世	市兵衛店	武兵衛	—
16	馬持	市兵衛地借	鉄五郎	—
17	廣屋	林右衛門地借	助次郎	—
18	味噌屋	家主	林右衛門	—
19	荒物屋	家主	嘉七(近江屋)	○
20	紺屋	家主	半次郎(中屋)	—
21	わらや	半次郎店	茂吉	—
22	かこ屋渡世	半次郎店	米吉	—
23	高入足	半次郎店	善蔵	—
24	—	家主	定七	—
25	—	半蔵店	徳太郎	—
26	—	市兵衛店	豊吉	—
27	—	吉兵衛店	金兵衛	—
28	—	吉兵衛店	留五郎	—

図2 「巢鴨町軒別絵図」(復元、部分) 作成：高尾善希

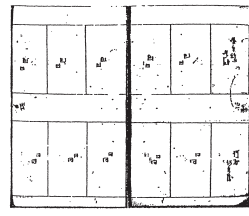
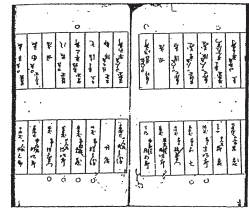


図1 「巢鴨町軒別絵図」(上)とその雛型(下)

町は青物や水菓子を物流で結ぶ結節点だったのでではないかと考えています。

いまの高岩寺辺りから下ったところは植木屋が多くなってきました。ここにも青物屋があります。また、植木屋と居酒屋、飯屋が近接して並んでいるのがときどき見られます。植木屋で見物した人が、ここでご飯を食べたり酒を飲んだりして楽しむような場だったのでないかと思われまます。

—— 景観の復元 ——

さて、絵図を現代の地図の上に重ね、「巢鴨町上組・上中組の景観復元図」を作成し

かご昇、かご昇渡世、交通関係の業者が江戸のいちばん遠い所(上組)にかなり集中していることがわかります。ほかにも、上組には水菓子屋や青物渡世などが非常に多いのです。不自然なのですが、どうやら巢鴨町は青物や水菓子を物流で結ぶ結節点だったのでではないかと考えています。

面白なのは、絵図(B)の寺子屋です。「巢

道を挟んで反対側も、同じように絵図を重ねていきます。絵図(E)の位置には鍛冶屋があつたはずなのですが、実際に鍛冶屋の遺構が出てきたのは⑤の地点でした。少しずれています。さらに下を見ていきますと、巢鴨町と武家地の境は絵図(F)の辺りになります。これも遺跡調査会の結果とほぼ一致しています。真性寺の門前は、実際の位置と五軒ぐらい離れてしまいましたが、大体は一致しています。

できるのです。

では、絵図を復元したのを見てください。真ん中が中山道です。木戸が四カ所あります。木戸の脇には自身番屋があり、往來を行く人を管理するなどしていました。途中から片側は武家地になります。庚申塚に近い部分から、飼養屋、馬持、

ました「図3」。現在の地図上の③④の場所は、鍛冶屋の遺構が出てきたところとところ。絵図を見ると、この辺に鍛冶屋があります。つまり、絵図(C)と現在の③、絵図(D)と現在の④はそれぞれ同じ地点だということになります。そこで、この③④間を絵図に示されている件数で均等に割りました。そうすると、大体一軒あたりの間口が出てきます。その幅をもとにも絵図を延長すると、絵図(A)の地点が現在の①にぶち当たります。この上にある道は江戸時代からの道でして、ここから巢鴨町が始まるようです。つまり、(A)①が巢鴨町の一軒目ということになります。

鴨総覧』という大正時代の絵には、現在の②の辺りに寺子屋があったことが書かれています。(B)と②は若干ずれていますが。つまり、大正時代の文献とほぼ一致しているということになります。

同じような作業を下中組・下組でも試みました。すると、五つのポイントでびったり一致しました。もちろん、実際に同じ間口がずっと続いているということはありません。軒の間に道が挟まっていることもあっただろうと思います。しかし、まずまずの結果が得られましたので、この絵図の

信憑性は高いと思われる。

境内作事絵図面

では次に、「境内作事絵図面」をご紹介します。これは真性寺の作事の絵図面です。

この絵図がつくられた背景は、文久二年の生麦事件にまで遡ります。翌年文久三年、被害者であるイギリスの軍艦がその報復のために横浜にやってきました。このとき、避難者のために疎開先の施設を確保しようと、時の老中井上正直が、寺社奉行と



図3 巢鴨町上組・上中組の景観復元 作成：高尾善希

勘定奉行に対し、「名主の家やお寺の家の広さを詳しく調べなさい」という命令を出した。そのときにつくられた絵図です。そういった絵図は『諸宗作事図帳』の中にたくさん綴じ込まれています。そこには幸運にも真性寺の絵図がありました。この『諸宗作事図帳』にはいろいろな年号のものがありますが真性寺のものに関しては文久三年三月のものしかありません。

絵図を見ると、土地利用のあり様がよくわかります。天保九年に作成された、「江戸名所図絵」のさし絵と比べてみると、九品仏堂・御番所・八幡宮・神明宮・拜殿・焰魔堂・庫裡・式台・御成門、こういった諸々の施設が文久三年当時とあまり変わっていないことがわかります。つまり、大体の土地利用の形というのは、幕末の文久三年まで引き継がれていたのだろうと考えることができます。

簡単ではありますが報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

たかお・よしき

一九七四年千葉県千葉市生まれ。立正大学大学院博士後期課程満期退学。博士(文学)。東京都公文書館非常勤職員・立正大学非常勤講師。

コメント①

江戸における場末地域研究の進展のために

東京都江戸東京博物館

市川寛明



今回のフォーラムの全体的な意義は、この巢鴨地域に対するイメージの豊富化にあったと思います。巢鴨は植木屋のイメージがかなり先行しています。もちろん研究的には評価されるのですが、逆にそういう研究史上の展開が、この地域イメージの画一化に帰結している危険性がある。

今回の発表では、発掘事例や資料を用いて、巢鴨の新しい多様なイメージを出すことに成功したのではないのでしょうか。

地道な調査や研究成果が、展示に結びつき、またこのようなフォーラムの開催へと繋がっていく。地域研究の拠点としての博物館の役割が、非常にうまく連環している

というのを感じます。そういう意味で、高く評価されていると思います。

戦後歴史学の中で、非常に大きなウエイトを占めていたのは、江戸の中心部の商業史的な研究、あるいは江戸周辺農村の研究でした。一方で、地域の博物館を拠点としながら四宿の研究も進んできています。しかし、江戸の中心部とこの四宿の中間領域に位置する場末地域の個別研究についてはなかなか進展していない。そういう意味では朱引内の場末地域の具体的な地域研究の事例として、今回の研究は非常に面白いと思います。

ここで、ほかに巢鴨地区と同じような地域の特質を持ったところとの比較研究ができないかと考えるのですが、そのような朱引内場末地域の地域事例の研究というのはなかなかありません。それがやはり今回の研究の貴重さというか、有効性を示しているのだらうと思います。

私は、新宿の内藤町遺跡、江戸東京博物館所蔵の四谷塩町一丁目文書の両方を見る機会がありましたので、これらを手がかりに巢鴨との比較を考えてみたのですが、どちらもびったりこない。本来ならば四谷塩

町一丁目と内藤宿の中間地域に、比較できる地域研究の事例があればいいのですが存在しません。そういうことが場末地域研究の遅れを示しているのだらうと思います。

—— 巢鴨の賑わいと植木屋の関係 ——

お三方のご報告に、少しずつ意見を述べさせていただきます。まず秋山さんの研究ですが、研究と展示をいかにリンクさせるか、いかにわかりやすくそれを提示するかというような点で、非常に苦心をされていて、同業者としてのシンパシーを感じました。

一、二点気になったのは、巢鴨の町がだんだんと賑やかになっていく過程の記述です。「巢鴨町は板橋宿に近い町場であり、旅人が足を留めることなく素通りする町であったため、町として賑わっている状態ではありませんでした」とあります。確かに旅人のことだけを念頭におくと、そういうことになるかもしれませんが、商品流通の結節点の観点からいくと、旅人が泊まらないからというだけで賑わっていないということにはならない気がします。商品流通の結節点としての地域の特質を埋め込んだス

トリー展開が必要なのではないでしょうが。

また、「町として繁栄していくためには、町へ多くの人を呼び込む必要がある。そこで考案されたのが、植木屋の菊作りである」という記述。確かにこの地域に植木屋がたくさん存在していて、それに向かって多くの人が来ていたというのは歴史的な事実なのですが、その因果関係の解明という点についてはいささか疑問です。ほんとうに人集めのために考案されたものなのでしょうか。ややもすると、結果論的な歴史イメージが出来上がる危険性も否定できないのではないかと思います。

―― 場末と中心地の分析 ――

成田さんのご報告について言えば、私は門外漢ですので非常に面白く聞かせていただきました。勉強になる点がいっぱいあって本当に面白かったです。

教えていただきたい点は、中山道沿いから奥深くまで土地の利用がされていくときに、奥行がどれぐらいのところ、いちばん端っこの生垣になるのかということですね。また、時期的な問題についてなのです。

が、畑の跡と、町屋の出来方の時期の相互関係はどうなっているのかというのが気になります。表通りに沿ったところではなくて、奥のほうにどれぐらい土地に対する利益が及ぶのかということが気になるわけです。

というのも、日本橋一丁目遺跡との比較で、都市の中心部と場末地域の比較検討の事例を出されていますが、どこが違うかということ議論することは、あまり生産的でないような気がして仕方がない。日本橋一丁目などですと、町の通りから離れたところでも大きな土蔵がいっぱい建ちまますし、それは土地の利益価値の違いであって、場末と中心部が違っていることは、あまりにも当たり前なのです。

また、中心部の特質は創設型で町が作り上げられるわけですが、巢鴨地域は自然史的な過程で、徐々に町場化を遂げていく。この経緯の差を考えても、両者は違いすぎて、どこが違うかが問題にはならないような気がします。むしろ検討すべきは、巢鴨地域に都市性みたいなものが、どのように芽ばえていくのかという観点のほうが正しいのではないのでしょうか。そういう意味で

は、表のほうかどのように使われていくのか、その利益が奥にどのように伸びていくのかという論点のほうが目白。その観点からいって成田さんの方向はどうだったのかが気になるわけです。

―― 資料の読解と分析の課題 ――

高尾さんが紹介された、「巢鴨町軒別絵図」とその遺跡の調査が符合するというのは非常に画期的で面白いと思いました。しかし、もうちょっと観点を変えたときに、この遺跡の調査から出てくる結果と軒別絵図の理解とが齟齬する部分はないのでしょうか。どういふところが齟齬するのだろうかというところが逆に気になります。

高尾さんの報告は、本当に史料をよく探されて大変貴重な発見されたという意味では、研究の発展にとっても大きな貢献をされたなと思います。しかし、この軒別絵図をどう理解するかというのが、今回の全体に関わる大きな論点かという気がします。

些末なことからいけば、青物屋が非常に多いということで、問屋街のような様相を呈していたのではないかという話でしたが、しかしこれを見るとほとんど店借層で

あつて、これが表に位置しているかどうかという点が今一つ自信が持てない。ですから、この結論についてはちよつと留保つきかなという感じがします。

それとの関係でいくと、絵図に示された土地所持関係をよく見ていくと、例えば二番からずつと下に「市兵衛地借、市兵衛地借」とあります。つまりこれは市兵衛店です。この市兵衛店の家主さんの市兵衛さんはどこにいるのかというと、反対側に家主市兵衛というのがありますので、これは居住が離れているパターンだなとわかります。

もちろん家主が同じところに住んでない事例は非常にたくさんありますから、ぜんぜん不自然ではありません。しかし、家主誰々と書かれていても、その家主の名前が付いた店とか地借というのがあまりにも少ない。一致しなくてももちろんいいのですが、それがあまりにも甚だしくはないで

しょうか。

それから、店が「〇〇店」といったとき、たった一人しかいない店も非常にたくさんあります。六左衛門店など、どう理解したらいいのか、ちよつと不自然な点がありはしないかという点ですね。

それから、文政町方書上の史料と数値を比較してみると、家持が文政段階には七四だったのが二五に激減し、店借が二〇四から一四四に激減する。これもどう理解するのか、大切な問題になってくるのではないかと思います。

それから、地借がごく少ないというのも気になります。全体的に家持の数も多い。あと日雇とか日傭とかはごく少ないなどというのを感じます。また、青物が非常に多いとのことについて言えば、確かに多いように見えますが、例えば内藤宿などは一五四軒中二四軒も青物があったりするわけです。四谷塩町で言えば、全一七四軒の

中で四分の一が日傭層なのです。こういうところとの比較の問題において数値の隔たりをどのように説明しうるのか気になりました。

ほかにもいろいろなことを思いますけれども、まず手がかりとして、これらの点をどう理解されるか、お聞きしたいと思います。

以上、私に気になった点を雑駁に述べさせていただきます。これで終わりたいと思います。

いちかわひろあき

愛知県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了(社会学博士)。江戸東京博物館 都市歴史研究室 学芸員。著書に『一目でみる江戸時代』(小学館、二〇〇四)、共著に『江戸の学び』(河出書房新社、二〇〇六)など。展覧会として「参勤交代」(一九九七)、「大江戸八百八町」(徳川将軍家) (二〇〇三)、「新選組!」(二〇〇四)、「江戸の学び」(二〇〇六)などを手がける。

国立歴史民俗博物館

岩淵令治



— 成果と課題 —

今回の発表の成果として三点をあげたいと思います。一番目に、みなさんの巢鴨の研究が、中心部ではない町のイメージをつくる試みであるという点が、非常に重要であると思います。私どもの博物館では、来年の三月に江戸時代の展示をリニューアルオープンするのですが、やはり中心部の町の展示がメインになってしまいました。場末の展示ができなかったことが心残りでしたので、今日は興味深くお話をうかがいました。

二番目に、この研究が発掘調査を契機にしている点、自治体史や豊島区立郷土資料

館の蓄積をベースにしながら、非常に小さい発掘調査地点をつなげて面のイメージを作られていった点がとても重要だと思えます。

三番目に、高尾さんによる「巢鴨町軒別絵図」の発見は非常に意義深いものだったと思います。巢鴨については今まで園芸—植木屋が注目されがちでした。しかし、この「巢鴨町軒別絵図」と発掘調査の成果を合わせて、巢鴨町の住民の多様な生業の一端が明らかになったわけです。

では、これらの上に立って、三つの課題を挙げたいと思います。

まず一番目は、高尾さんの「巢鴨町軒別絵図」の分析についてです。これはさらに景観復元を進めることができると思えます。とくに均等割で屋敷を割付けていくという方法は、概略はつかめるものの、大雑把な印象をうけます。近代の地籍図など、明治二二年や二八年ぐらいになると、かなり正確な地割がありますし、また、幕末の巢鴨の村絵図(国立国会図書館蔵)には巢鴨町の北側しか描かれていませんが、町の外寸が入っています。景観の研究を行なうのであれば、こうした寸法と明治の絵図の敷地

を合わせ、可能な限り一つ一つの敷地(町屋敷)を復元していくべきではないかと思えます。

二番目に、景観復元では、そこに住む人びとが何をやっているのかが伝わってこなかった。まだ現在の分析では、「人のいない景観」とどまっていると思います。のちに植木屋として成功する内山長太郎さんのサクセスストーリーなどは面白いのですが、全体としては職種の割合を示すにとどまっています。巢鴨の村の中からのように町が成立して、どのような関係をもったのか。また、何をどこから買って、どこに売っているか、あるいはその人たちがどういう人間関係なのかという、社会の復元に至っていないのではないのでしょうか。

三番目に、以上の課題に取り組むことで、中心部との対比で語られる漠然とした「場末の町」の一般論を乗り越え、地域の個性を読み取ることができると考えます。こうした作業を複数の地域で行なうことで、「場末の町」論の再構築が可能になるでしょう。私は朱引と墨引の間の地域を、場末でも近郊農村でもない特色を持つとみて、「近接農村」という言い方をしたこと

があります(岩淵令治『江戸武家地の研究』塙書房、一九九四)。村の中には抱屋敷という武家の屋敷があるなど、かなり江戸の場末と密着している。しかし、完全な村ではない、このようなところをどう扱っていいのか。こうした場を描いていくためには、もつと人と人との関係であるとか商売の中身であるとか、景観のみならず、当該の社会を分析していくことが不可欠なのではないかと考えます。では課題に関係して、いくつかお話をしたいと思います。

――「巢鴨町軒別絵図」の史料批判――

まず「巢鴨町軒別絵図」についてですが、これは和宮の家来が泊まるときの調査ですので、記されている住民は、表長屋の人に限られている可能性が高いと思います。発掘成果ですと、裏はほとんど何もないのではないか、あるいは作業場だというお話もありました。しかし、私は裏店は皆無ではないだろうし、これを欠いた景観や社会の復元には問題があると思います。

まず、住民の中に家主さんが非常に少ない。しかし、家主さんは別に表に住んでいなくてもいいわけですから、記載されてい

ない可能性があるのです。

それから、『八品商名前帳』(一八六六「慶應二年、国立国会図書館蔵」という、古着や古道具屋などの商売の人びとの公式の名簿があるのですが、この中に出てくる借家について、「巢鴨町軒別絵図」では家主の名前があるのに、借家人の名前は書かれていない例が多数みられます。年代が「巢鴨町軒別絵図」とは五年ずれるものの、公文書で確認できる情報が「巢鴨町軒別絵図」では欠落しているのです。

また、絵図と同時期のもので、保坂徳右衛門という人の香典帳が残されています(『豊島区史』資料編)。ここには、上組の紺屋のところにも房次郎という料理人が出てきます。しかし、「巢鴨町軒別絵図」には記載がありません。

この「巢鴨町軒別絵図」が場末の住民を語る稀少な史料であることは間違いないと思います。しかし、ここには住民すべての情報が記されているわけではないのです。この点を十分に留意する必要があります。高尾さんが算出された住民の職種の内訳は、データとしては不正確なのです。

また、先ほど、より精度の高い景観復元

の可能性を指摘しました。最近の研究では、空間・社会の分析をする際、一つの敷地の単位(町屋敷)を重視しています。敷地の復元と合わせて、町屋敷単位での住民構成の復元を追求すべきではないかと思えます。

――巢鴨町の成立――

次に、巢鴨町ができた時期について。これはなかなか確定が難しいのですが、まず巢鴨村より江戸寄りにあたる、東隣の駒込村の分析結果から推定しておきたいと思えます(『江戸武家地の研究』)。駒込村の場合、一七世紀前半にまず中山道沿いの江戸寄りのところから町が成立し、ついで武家屋敷ができ、さらに大火後の都市計画にもなつて寺が移転してきます。こうした中では、六義園の隣りにあたる巢鴨村の津藩藤堂家の下屋敷は、明暦ぐらいに成立していますので、巢鴨村では突出して早い例といえます。

一七世紀の後半、寛文から延宝ぐらいになると、巢鴨のあたりまで町が成立してきます。王子に向かう日光御成道(現在の本郷通り)でも、同様です。こうして、最後に

染井道に町場が成立してくるわけです。

このように考えてくると、大体一七世紀の後半ぐらいに、町場化が進んでいてもよいのではないかと思います。

寛文一一(二七七〇)年刊行の「新板江戸大絵図」という地図には、巢鴨町の下組、いちばん江戸寄りのところが町と記されています。巢鴨が行政上「町」と認められるのは一八世紀半ばですが、地図を作っている人はすでに町として認識していたということでしょう。

それから、享保九(二七二四)年の加賀藩の中屋敷の火消の出動範囲を示した図を見ますと、巢鴨の町が展開して描かれています。町は中組・下組は成立しているけれど、まだ全体としては形成過程であることがわかります。

このように一七世紀後半から、徐々に町場が成立している。行政上では町ではないのですが、事実上は町場なのです。

武家屋敷と巢鴨町

— 加賀藩中屋敷の事例を中心に —

ではここから、巢鴨での人の生活についてご紹介したいと思います。

まずお話ししたいのは、辻番所です。武家

屋敷は、幕府から命じられて番所を設け、一定の範囲を廻り場として路上の警備(不審者の捕縛や喧嘩の当事者の身柄拘束、捨子や行き倒れの保護など)を行なっています(江戸武家地の研究)。巢鴨町は通りをはさんで武家屋敷と面していて、下組のちょうど真ん前に番所があります。廻り場の絵図を見ますと、道路の中央に線が引かれていて、道路の片側の警備を武家屋敷が、もう片側の警備を巢鴨町の下組がやっていたようです。

また、和宮下向のときには、道の修復も行なわれたのですが、その工事はそれぞれの住民が場所を区切って分担しました。あるところまでは巢鴨町が、あるところからは加賀藩が、そしてあるところからは松平越前守という大名を頭とする七人の武家が分担して、道の普請を共同してあたっています(『万日記』豊島区史資料編一)。

道の維持については、巢鴨下町家持と家主惣代から加賀藩に中屋敷前の道普請を願い出した願書が残されています(御手役者并御用聞町人一件)。道路など公共の空間の維持については、武家屋敷と関係を持っていたことがうかがえます。

また、巢鴨町が火事の時には、屋敷の防火のためなのですが、加賀藩の鷹が火を消しに来てくれます。

こうした公共の空間の維持にかかわる関係のほか、藩の奉公人(中間)と商人の関係がうかがえる史料もあります(御中屋敷諸事記)。寛政九(一七九七)年にある小者(最下層の中間)が持病を起こしたので、休みを取らせて薬を取りに行かせたが、帰ってこない。何をやっていたのか糺したところ、巢鴨町の高崎屋半兵衛という商人の家にいたという。そこで何をしていたのかは不明ですが、中間と高崎屋とはおそらく日常的な関係があったのでしょう。

この事例はおそらく氷山の一角で、巢鴨町の商人は武家屋敷あるいは屋敷内の個々の住民と直接関係を持っていたと思われるます。

巢鴨村の中の巢鴨町

いまお話ししたのは、武家屋敷との関係を見て、社会を描く視点が広がらないかという提案でした。今度は、巢鴨村の中の巢鴨町という目で見たらどうかという提案です。「巢鴨町軒別絵図」に植木屋(高尾氏の表

の二一九番」として記載されている保坂徳右衛門は、町に住んでいます。実は身分は百姓です（『豊島区史』通史編）。三三人の小作を雇っていて、雑司ヶ谷村・原町・小石川五軒町・本村五軒家・滝野川村といった村外の人も関係を持っていました。また、香典帳では村内のほかに、隣接する村、からも、大勢申間に来ています。このように、一人の人間を素材にして、どのように人間関係が広がっているのか、活動範囲がどうなっているのかを見ていくことが必要でしょう。

また、この人の小作人が、「巢鴨町軒別絵図」に記載された住民のリストの中に存在しています（四七植木屋 小兵衛店久五郎保坂の小作人「巢鴨上組 百姓 久五郎」）。ですから町だけを見ては駄目で、町の外に広がる耕地というものに広げて見ていく必要があるのです。これは、場末といいますが、村の中の町ならではの特色なのではないでしょうか。

—— 職種—— 駒込村との比較 ——

最後に職種ですが、巢鴨村の商人で問屋株を所持している者は非常に少ない。しか

し、この巢鴨町で興味深かったのが、八品商が多く居住している点です。八品商とは、古着や金属の売買、それから古道具などを扱う商人のことです。巢鴨町居住の八品商はのべ二人ですが、これは周辺の町と比べると突出しています。江戸よりの隣村、駒込村内の町々と比較してもかなり多いのです。

質屋については六人いますけれども、これはすべて家持なので、巢鴨町の場合、質屋は地域の有力者がつとめていることが多いようです。ちなみに江戸の質屋の割合は、家持が三割、家主が一八%ですから、家持の割合の高さは巢鴨町の特徴の一つとみてよいでしょう。こうした質屋は、武家を顧客としていた可能性もあります（戸沢行夫「八品商としての質屋」『史学』五一巻四号、一九八一年）。

また、古鉄・古道具・古着買を兼業する人が一四人いて、これも割合としては非常に多い。古鉄屋は江戸の約一七〇〇町で計六三五人ですから、巢鴨町の居住率はかなり高いと思います。ちなみに、このうちの一人はちょうど発掘で確認された鍛冶屋の位置に該当していて、「巢鴨町軒別絵図」

とも一致します（二四一番）。

それから高尾さんが気にされていた青物についてですが、將軍に物を納品する役を担う、幕府が統制している組合に入っている者が一名いて、家持です。ちょうど「巢鴨町軒別絵図」と同じ時期に存在しています。この人物が、駒込の市場に出かけて行って仕入れてくる者なのか、あるいは、問屋としてさらに市場を開き、その小売りのような者がさらに周りにいるのか、といった点は検討課題です。

以上の主旨は、視点を増やして史料を見ていくことで、さらにもっと細かく巢鴨町を明らかにすることができるのではないかと考えています。こうした作業によって、漠然とした「場末の町」ではなく、さらにその地域性や個性が明らかになるのではないかと。その上で場末の町のイメージを再構築していく必要があると考えます。

いわぶち・れいじ

一九六六年東京生まれ。東京大学大学院（一九九九年博士取得）。東京都江戸東京博物館専門研究員を経て、現職。著書に『江戸武家地の研究』（塙書房、一九九四）、共著に『日本の時代史 一五 元禄の社会と文化』（吉川弘文館、二〇〇三）ほか。

質疑応答

司会(小林)——それでは各発表者の方に、コメントに対する返答も含めて簡単にお話をしていただきたいと思います。それでは秋山さんからお願いします。

秋山——まず、市川さんからのコメントについてですが、「旅人が素通りするということだけで、巢鴨町が賑わっているか、いなかを評価できるのか」というご指摘をいただきました。これは確かにその通りです。今回はその辺を裏付ける資料がなかったため、今後の課題にしたいと思います。

また、「菊作りが町の活性化につながったのだというストーリーは因果関係が論証されておらず、強引ではないか」という指摘もいただきました。確かに少々強引な部分もありますが、詳細にみていくと、菊見ブームが起こる文化年間に至るまで、巢鴨の植木屋がいろいろな工夫をしていることがわかります。

『遊歴雑記』によると、初めは単純な「花壇作り」から始まって、菊の高さを大きく

して、一階から花の裏側を見て二階に上って花を正面から見るという「高作り」や、一本の菊からいろいろな種類の菊を咲かせる「咲分けの菊」といったものを経て、「形作り」が出てきたことがわかります。それが巢鴨町の発展のためなのか、単に植木屋の繁栄のためなのかはわかりませんが、そうしたことを踏まえて、今回の展示のストーリーに組み込んでみました。

司会——会場からの質問です。文京区の平野さんから。「街道の問題やまちおこしの問題など、植木屋を抜きに巢鴨町は語れないと思うのですが、いかがでしょうか。」

秋山——今回私が考えたのは、植木屋の存在を特殊化しないことです。江戸の周辺には大名屋敷や武家屋敷や寺社がたくさんあって、その維持管理をするために植木屋も当たり前のようにあったのだらうと思います。染井や巢鴨の植木屋研究は突出した感がありますが、実際は江戸の周辺にはあたり前のように植木屋が分布していたのではないかと。そういった前提で、今回の展示を企画しました。

司会——秋山さんにもう一つ質問です。細谷さんから。「庚申塚には『仲山道』という

モニュメントがありますが、『中山道』と書くのが一般的になった理由は何ですか。」

秋山——東海道は、京都から見たときに、東へ向かう海沿いの道だから「東海道」なわけです。そうすると、東へ向かう山沿いの道は「東山道」となります。東山道が何筋かあって、その中筋の道が「中山道」だと理解すればよいかと思います。

司会——どうもありがとうございます。では次に、高尾さんへの質問です。谷下さんから。「商人または百姓の人々はどこに住んでいたのですか。」

高尾——巢鴨村に関しては、今回享和元年の巢鴨村の村絵図が、この上に展示されています。人の名前と家がちゃんと描いてあって、どの辺に住んでいるかというのがわかりますので、それをご覧いただければと思います。

また、町屋は百姓地なのかという疑問がでてきますが、「巢鴨町軒別絵図」に出てくる人たちは、町人ではないと思います。これは増上寺村の百姓身分の人たちが、いわゆる商人的な経営を許されていることになります。以前、巢鴨町を表現するのに「町人地」と書いたことがあるのですが、「町人地」

ではなくて、「町方」であると、ある研究者から指摘されました。そういうちよつと変わった位置づけになっています。

司会——コメントに対するお答えもいただきますか。関連していますので。

高尾——まず市川さんからのコメントに対してですが、実はよくわからないというのが正直なところですよ。こういう絵図が見つかることは本当に珍しいことなので、事例数が少なく、ほかの場末町との比較ができないのです。ただ、確かにおかしいところはいくらでもあります。これは今後の検討課題になると思います。

まず、「巢鴨町に住んでいる家主が少ない」件については、裏手の巢鴨村に住んでいる百姓が家主をやっている、あるいは家持をやっている可能性があります。巢鴨町というのは巢鴨村から出てきているので、その形成の特徴がそういうところに現われているのかもしれませんが。家持一人だけの店や地借が少ないことについてはよくわかっています。

「文政書上と比べて人数が極端に少なくなっている」件については、裏店があった可能性がります。私の紹介した絵図には

描かれていませんでしたが、この絵図は和宮降嫁のために作られたものなので、表だけが描いてある可能性があるのです。一見して面白い絵図で、何でも描いてあるように見えるけれども、限界というものも考えなければいけないだろうと思います。

「新宿に比べて青物が少ないのではないか」ということについては、確かにそうですが、新宿はあまりにも立地条件が良すぎ、比較する例として妥当かどうか。巢鴨町の中だけで比べてみると、青物は江戸から遠い上組に集中していますので、ここでは青物が非常に重要だったということは、妥当性を持つていると思います。

あと岩淵さんのお話で、「明治時代の地券との比較、あるいは国会図書館の巢鴨村の絵図との比較をしてはどうか」という話がありました。これから研究をしようと思っていたので、ご指摘をいただいて非常に自信を持ちました。

また、「巢鴨町の下組が非常に早い時期にできているのではないか」というご指摘がありました。が、享保年間ですから随分早い時期なのですが、下組の辺りに馬市が立っているという史料が『東京市史稿』に

出ています。ですから、私も巢鴨町の中でもいちばん江戸に近い下組は形成が早いのではないかと考えていましたので、非常に貴重な情報でした。

「職種のパーセンテージをそのまま素直に出していいのか」というお話でしたが、確かにそうです。この絵図の限界性はもう一つあって、それは、数ある渡世(稼業)の中の代表的な一つを取り上げたにすぎないという



ことです。例えば内山長太郎が幼い頃は、父親が味噌漉と笹屋を商っており、それが嫌だと言って息子は植木の渡世を行なった。つまり内山家では親父と息子で最低でも三つの渡世があったわけですから。そのうえ母親や兄弟は違う渡世をしていたかもしれませぬ。町の商人の経営では、複数の渡世をやっているのが普通なのです。その中の代表的なものを一つ取り上げているのですから、この絵図ですべてを語ることはできない。

ただ、そうであったにしても、これだけ大きな絵図で、しかも地域によって渡世に偏差がありますから、やはりこれは依然として注目すべきことと思っています。

最後に、「『巢鴨町軒別絵図』に描かれていた人たちの動きをつける」ことについて。どういう人間関係があったのか、物がどこからどこへ運ばれてくるのか。これはなかなか重要な問題であって、これからの研究課題ということになるわけですが、今の若干の見通しとしては、おそらく川越街道との関係が強いのではないかと思っています。そのことは、「川越屋」という屋号を持った商人がいることや、内山長太郎が川越街道の白子宿近在の出身であることなど

からも推測できます。川越街道というのは非常に重要だったのではないのでしょうか。

また、板橋区史の史料編に新河岸川の舟運と川越街道の馬方とで、需要を取り争って争論になるという史料が載っていて、新河岸川を使って途中で荷を降ろして、板橋、巢鴨に運ばれてきているのではないかと推測しています。なかなか史料を探すのは大変です。これからそれを示唆するような論文を書いてみたいと思っています。

司会——どうもありがとうございます。では成田さんお願いします。

成田——市川さんのコメントで、「奥行や都市性がどのような形で見えてくるのか」というお話があったのですが、ハーモニーハイツで見ていただいた鍛冶屋だと、奥行四〇メートルです。

ただ敷地の裏側の空間に、建物が建つというのには実際にあって、ある段階から後になると、礎石建ての建物が建ってきます。それがいつなのかというのはなかなかわからないのですが、恐らく近代に入るぐらいかもしれない。そのぐらいにならないといちばん奥の空間まで建物が入ってきません。それと岩淵さんの話で、巢鴨町以前につい

てのいくつかの絵図を見せていただきました。実は発掘でもそれ以前のものがまったく無いわけではなくて、一七世紀代の遺物なども出土しています。おそらく一七世紀の後半には、確実に生活があっただろうと考えているわけですが、ただ、下組のほうが古いという話については、検証できないでいます。と言うのは、上組の端の庚申塚のすぐ向かいのところで発掘調査をしまして、そこでは建仁元年、近世を通り越して中世の道路の側溝が見つかっています。そうした時代から、すでに人の手が入っているのは間違いないと思っています。

ほかにも自然地理の地形的な分析から、考えていることもあります。下組のほうが古いことに関しては、発掘からは一概に断言できない状況があります。以上です。

司会——今日は地域史、さらには地点史というところで、学際的な最先端の研究をわかりやすく話していただきました。こういう研究を今後も続けることによって、江戸東京学が極めて実証的に、また地域に役立つ形で進化していくのだと考えています。

今日は参加していただきました皆さま、長時間どうもありがとうございます。

1986年

- | | | | |
|-----|------------------------|---------|---------|
| 第1回 | 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供 | 小 木 新 造 | 歴史民俗博物館 |
| 第2回 | 都市下層社会の形成と変容 | 内 田 雄 造 | 東洋大学 |
| 第3回 | やわらかい都市構造 | 陣 内 秀 信 | 法政大学 |
| 第4回 | 考現学の考古学 | 佐 藤 健 二 | 法政大学 |
| 第5回 | 明治期の道路(街区)・路地の幅員基準について | 石 田 頼 房 | 東京都立大学 |

1987年

- | | | | |
|------|-----------------|----------|---------|
| 第6回 | 博覧会と盛り場の明治 | 吉 見 俊 哉 | 東京大学 |
| 第7回 | 明治期の繁華街の建築 | 初 田 亨 | 工学院大学 |
| 第8回 | 東京の土地・住宅史 | 長谷川徳之輔 | 建設経済研究所 |
| 第9回 | 江戸の構成と構造 | 加 藤 貴 | 北区教育委員会 |
| 第10回 | 水の都・深川成立史 | 吉原健一郎 | 成城大学 |
| 第11回 | 江戸の建築技術 | 西 和 夫 | 神奈川大学 |
| 第12回 | 松浦武四郎の一畳敷の書齋 | ヘンリー・スミス | コロンビア大学 |
| 第13回 | 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京 | 井 上 勲 | 学習院大学 |
| 第14回 | 路上から見た江戸・東京 | 藤 森 照 信 | 東京大学 |
| 第15回 | 東京書物探索入門 | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第16回 | 神田のサウンド・スケープの研究 | 鳥 越 けい子 | 法政大学 |

1988年

- | | | | |
|------|----------------------------|---------|-----------|
| 第17回 | 絵画史料にみる江戸の町 | 波 多 野 純 | 日本工業大学 |
| 第18回 | 明治期東京の飲料水販売 | 松 平 康 夫 | 東京都公文書館 |
| 第19回 | 江戸城御殿の室内空間について—障壁画下絵による復原— | 西 和 夫 | 神奈川大学 |
| 第20回 | 小江戸・川越のまちとすまい | 内 田 雄 造 | 東洋大学 |
| 第21回 | 現代東京の祝祭 | 松 平 誠 | 立教大学 |
| 第22回 | 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住 | 岡 本 哲 志 | 岡本都市建築研究所 |
| 第23回 | 浅草寺の境内・門前世界 | 竹 内 誠 | 東京学芸大学 |
| 第24回 | 都心定住を考える—市街地の「町」の現代的意味— | 奥 田 道 大 | 立教大学 |
| 第25回 | 都市社会調査の歴史から | 佐 藤 健 二 | 法政大学 |
| 第26回 | 世界都市東京の光と影 | 町 村 敬 志 | 筑波大学 |

1989年

- | | | | |
|------|---|---------|---------|
| 第27回 | 都市の語り出す物語 | 宮 田 登 | 筑波大学 |
| 第28回 | 江戸の都市計画—江戸前島を中心として— | 鈴 木 理 生 | 区立京橋図書館 |
| 第29回 | 江戸の武家屋敷について | 北 原 糸 子 | |
| 第30回 | 江戸の被差別・東京の被差別—もうひとつの江戸・東京— | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第31回 | 江戸東京の遊び—かるたを中心に— | 村 井 省 三 | 村井かるた館 |
| 第32回 | 森鷗外の都市論 | 石 田 頼 房 | 東京都立大学 |
| 第33回 | 東京都心部における空間利用形態 | 山 下 宗 利 | 筑波大学 |
| 第34回 | 「響き」としての東京の街なみ—神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に— | | |

.....鳥越けい子 サウンドスケープデザイン
第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題.....奥田道大 立教大学

1990年

第36回 鶴屋南北の幽霊.....横山泰子 国際基督教大学
第37回 東京と近代詩.....行吉正一 江戸東京博物館
第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐるマンションの老朽化と建て替え問題.....内田雄造 東洋大学
第39回 東京の地価.....前田尚美 東洋大学
第40回 江戸の地価.....伊藤好一 関東近代史研究家
第41回 江戸のごみ処理.....伊藤好一 関東近代史研究家
第42回 都市農業と土地問題.....石田頼房 東京都立大学
第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京.....吉見俊哉 東大新聞研究所
第44回 江戸の名所・王子.....加藤貴 北区教育委員会
第45回 上水からみた江戸の都市計画.....波多野純 日本工業大学
第46回 江戸名所絵における遠近法.....ヘンリー・スミス コロンビア大学

1991年

第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗.....丸山伸彦 歴史民俗博物館
第48回 鋏形蕙斎の江戸一目図屏風.....小澤弘 調布学園女子短大
第49回 見立絵というもの.....鈴木重三
第50回 江戸住宅事情.....片倉比佐子 東京都公文書館
第51回 江戸・明治・大正のすまい.....平井聖 昭和女子大学
第52回 最近の自治体住宅政策について.....林泰義 計画技術研究所
第53回 東京市営住宅事業について.....内田青蔵 東工大附属高校
第54回 東京における水際土地利用の変容—日本橋川と隅田川を中心として—.....岡本哲志 岡本都市建築研究所
第55回 江戸から東京への景観構造変化.....窪田陽一 埼玉大学
第56回 東京都の都市計画と河川運河.....昌子住江 関東学院大学
第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい.....内田雄造 東洋大学

1992年

第58回 新宿ヤミ市の復原.....松平誠 立教大学
第59回 鋏形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる.....小澤弘 調布学園女子短大
第60回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる—.....小木新造 江戸東京歴史財団
第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動.....鈴木栄一 千代田区議員
第62回 近代演劇人による伝統の発見.....横山泰子 国際基督教大学
第63回 博覧都市江戸東京.....吉見俊哉 東大新聞研究所
第64回 読売から新聞まで.....GERALD GROEMER
第65回 音の風景と近代の忘れもの—大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる—.....鳥越けい子 サウンドスケープ機構
第66回 三越百貨店が演出した文化生活.....初田亨 工学院大学
第67回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人—.....陣内秀信 法政大学

第 68 回 都市のまつり 宮 田 登 筑波大学

1993 年

- 第 69 回 江戸、初期の土地問題 吉原健一郎 成城大文学
第 70 回 江戸勤番武士の生活 竹内誠 東京学芸大学
第 71 回 江戸のおんな 杉浦日向子 江戸風俗研究家
第 72 回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合— 加藤仁美 跡見学園短大
第 73 回 新説・日本近代住宅史 藤森照信 東京大学生研
第 74 回 幻の東京オリンピックと万博 磯村英一 東京都立大学
第 75 回 東京市社会局と都市社会調査 佐藤健二 法政大学
第 76 回 近代における東京の都市庶民住居の発展 江面嗣人 文化庁文化財
第 77 回 江戸の町と京都の町 小川保 清水建設(株)技研
第 78 回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる— 伊藤毅 東京大学
第 79 回 谷中墓地をめぐる 森まゆみ 谷根千工房

1994 年

- 第 80 回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地— 八木澤壮一 東京電機大学
第 81 回 葬式のフォークロア 宮田登 筑波大学
第 82 回 東京—極集中と今後の課題—より豊かな都市空間をめざして—
..... 東郷尚武 東京市政調査会
第 83 回 東京都政の 50 年 大串夏身 昭和女子大短大
第 84 回 博物館の住宅展示を考えて—人々は生活史をどうみるか— ジョルダン・サンド
第 85 回 都市空間とセクシュアリティ 上野千鶴子 東京大学
第 86 回 メディアとしての絵はがき 佐藤健二 法政大学
第 87 回 メキシコシティと東京の間で 吉見俊哉 東大社会情報研
第 88 回 北京と東京の比較都市論—歴史的空間構造と近代化のメカニズム—
..... 陣内秀信 法政大学
第 89 回 川越のまちなみの復元 内田雄造 東洋大学
..... 浅井賢治 東洋大学
第 90 回 河鍋暁斎と江戸東京 小木新造 江戸東京歴史財団

1995 年

- 第 91 回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本— 小澤弘 調布学園女子短大
第 92 回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺 丸山伸彦 歴史民俗博物館
第 93 回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料 天野隆子
第 94 回 歌謡曲のなかの東京 大串夏身 昭和女子大短大
第 95 回 江戸の着物文化 田中優子 法政大学
第 96 回 江戸東京学への招待試論 小木新造 江戸東京博物館
第 97 回 「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説— 伊藤毅 東京大学
第 98 回 盛り場考 神崎宣武
第 99 回 近世都市空間の創出過程について—都市構築の基盤材調達の視点から—
..... 北原糸子
第 100 回 江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間— 小木新造 江戸東京博物館
..... 陣内秀信 法政大学

		高階 秀爾	国立西洋美術館
		田中 優子	法政大学
	司 会	内田 雄造	東洋大学
第 101 回	都市の民俗学—色・音・匂の変化—	小林 忠雄	歴史民俗博物館

1996 年

第 102 回	同潤会柳島アパートの生活	大月 敏雄	東京大学
第 103 回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について	佐藤 滋	早稲田大学
第 104 回	住文化の体験の場としての博物館	小澤 紀美子	東京学芸大学
第 105 回	縁切寺—東慶寺と満徳寺—	高木 侃	関東短期大学
第 106 回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小林 克	歴史文化財団
第 107 回	日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の 2 つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—	平井 聖	昭和女子大学
第 108 回	震災復興〈大銀座〉の街並みから	石川 幸恵	清水建設(株)
第 109 回	明治初年の大火と貧富分離論	石田 頼房	工学院大学
第 110 回	戦災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—	越沢 明	長岡造形大学
第 111 回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤岡 洋保	東京工業大学
第 112 回	カフェーと喫茶店	初田 亨	工学院大学

1997 年

第 113 回	橋のアーバン・デザイン	伊東 孝	日本大学
第 114 回	城下町大坂、江戸の都市設計	篠原 修	東京大学
第 115 回	東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—	布施 六郎	東京都
第 116 回	江戸・東京の湯屋	松平 誠	女子栄養大学
第 117 回	江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容—	米田 雅子	
第 118 回	江戸藩邸物語	加藤 貴	
第 119 回	建築家、佐藤功一と都市への視線	米山 勇	江戸東京博物館
第 120 回	明治の歌謡にみる東京	大串 夏身	昭和女子大短大
第 121 回	「江戸名所図会」と長谷川雪旦	鈴木 章生	江戸東京博物館
第 122 回	町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—	波多野 純	日本工業大学
第 123 回	参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—	原 史彦	江戸東京博物館

1998 年

第 124 回	寛永 13 年江戸城外堀普請と周辺地域の変化	榎木 真	新宿歴史博物館
第 125 回	関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて—	藤沢 靖介	部落解放研究所
第 126 回	明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から—	友常 勉	部落解放研究所
第 127 回	関東大震災と朝鮮人虐殺事件	石田 貞	埼玉同和教育協
第 128 回	原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—	柳瀬 有志	法政大学
第 129 回	横浜市の市営住宅事業について	水沼 淑子	関東学院女子短大
第 130 回	目白文化村とその変貌	八木 澤壮一	東京電機大学
第 131 回	地域学の明日を考える	小木 新造	江戸東京博物館

		橋 爪 紳 也	京都精華大学
		結 城 登 美 雄	まちづくりプランナー
		森 ま ゆ み	作家/谷根千工房主宰
	司 会	陣 内 秀 信	法政大学
第 132 回	江戸歌舞伎の特色	服 部 幸 雄	日本女子大学

1999 年

第 133 回	東京・明治大正の人口問題	小 木 新 造	江戸東京博物館
第 134 回	江戸東京フォーラムと住総研 伝統的な履歴書	大 坪 昭	住宅総合研究財団墨壺
		吉 田 良 太	住宅総合研究財団
第 135 回	「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—	川 田 順 造	広島市立大学
第 136 回	都市と農村の蜜月時代—近郊農業の展開と流通の変化—	江 波 戸 昭	明治大学
第 137 回	永井荷風と東京	湯 川 説 子	江戸東京博物館
第 138 回	地域雑誌からみた町	立 壁 正 子	『ここは牛込、神楽阪』
		野 口 由 紀 子	『武蔵野から』
		大 野 順 子	町雑誌『千住』
	司 会	森 ま ゆ み	作家/谷根千工房主宰

2000 年

第 139 回	「ニュースの誕生」展と江戸東京学	木 下 直 之	東大総合研究博物館
		北 原 糸 子	東大社会情報研究所
		佐 藤 健 二	東京大学
		吉 見 俊 哉	東大社会情報研究所
		富 澤 達 三	神大常民文化研究所
第 140 回	長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」	西 和 夫	神奈川大学
		千 野 香 織	学習院大学
		波 多 野 純	日本工業大学
第 141 回	☆大久保にみる都市の国際化	稲 葉 佳 子	(有)ジオ・プランニング
第 142 回	☆神田多町—震災復興の「まち」から見えるもの—	小 藤 田 正 夫	千代田区まちづく公社
第 143 回	築地・横浜の外国人コミュニティ	森 田 朋 子	お茶の水女子大学
第 144 回	江戸東京フォーラムの果たした役割	太 田 博 太 郎	日本学士院
		小 木 新 造	江戸東京博物館
		陣 内 秀 信	法政大学
第 145 回	遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—	波 多 野 純	日本工業大学
		後 藤 宏 樹	千代田区四番町資料館
		栩 木 真	新宿歴史博物館
	司 会	小 林 克	江戸東京博物館

2001 年

第 146 回	江戸の見世物	川 添 裕	見世物文化研究所
第 147 回	☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み	所 理 喜 夫	足立区立郷土博物館
		荒 居 康 明	町並み研究家
		波 多 野 純	日本工業大学
		大 野 順 子	町雑誌『千住』

- 第 148 回 祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成—神田祭りを主な素材として—
伊藤 裕久 東京理科大学
- 第 149 回 江戸の女性と布橋灌頂会—立山博物館の試み—
鳥越 けい子 聖心女子大学
米原 寛 立山博物館
- 第 150 回 都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—
波多野 純 日本工業大学
初田 亨 工学院大学
大月 敏雄 東京理科大学
森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰
東 孝光 建築家・千葉工大
司 会 陣内 秀信 法政大学

2002 年

- 第 151 回 モダン都市・東京の読書空間—読書装置の 1920～30 年代—
永嶺 重敏 東大資料編纂所
佐藤 健二 東京大学
- 第 152 回 近代皇族邸宅にみる和風と洋風
水沼 淑子 関東学院大学
小沢 朝江 東海大学
- 第 153 回 江戸と怪談と怪異空間
内田 忠賢 お茶の水女子大学
コメンテータ・司会 横山 泰子 法政大学
- 第 154 回 ☆向島の成立と下町気質
佐原 滋元 向島百花園茶亭さはら
- 第 155 回 関一と近代大阪の再創造
ジェフリー・ヘインズ オレゴン大学
コメンテータ 石田 頼房 東京都立大学
" 内田 雄造 東洋大学
通 訳 ビュスト 東京大学

2003 年

- 第 156 回 大江戸八百八町と日本橋界隈—『熙代勝覧』の世界—
コメンテータ 波多野 純 日本工業大学
" 森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰
" 竹内 誠 江戸東京博物館
" 市川 寛明 江戸東京博物館
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
- 第 157 回 もう一つの東京の近代住宅史：私論
山口 廣 日本大学
- 第 158 回 江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー— 基調講演 全相 運 韓国科学技術翰林院
コメンテータ 川田 順造 神奈川大学
" 高田 誠二 北海道大学
" 中村 士 国立天文台
" 橋本 毅彦 東京大学
" 波多野 純 日本工業大学
" 渡邊 晶 竹中大工道具館
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
" 鈴木 一義 国立科学博物館
- 第 159 回 ☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」
堀江 亨 日本大学
松山 薫 東北公益文科大学
高橋 幹夫 文化誌研究者

- 第160回 幻燈から映画へ—転換期の映像メディア— 岩本憲児 早稲田大学
 第161回 都市への記憶：「満州国」建築へのまなざし 古賀由起子 コロンビア大学
 コメンテータ 西澤泰彦 名古屋大学

2004年

- 第162回 音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉 秋山宏 日本大学
 第163回 江戸東京に於けるスラムの発生と変容 内田雄造 東洋大学
 コメンテータ 加藤貴 早稲田大学
 第164回 ☆銀座の歴史と都市文化を考える 岡本哲志 岡本都市建築研究所
 第165回 よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—
 基調報告 谷川章雄 早稲田大学
 “ 波多野純 日本工業大学
 事例報告 後藤宏樹 千代田区四番町資料館
 “ 佐藤攻 東京都埋蔵文化財センター
 “ 松尾信裕 大阪市文化財協会
 “ 扇浦正義 長崎県都市整備推進課
 司会 小林克 江戸東京博物館

2005年

- 第166回 江戸の養生所 安藤優一郎 江戸・都市史研究家
 コメンテータ 勝木祐仁 文化女子大学
 第167回 再考—小木新造の江戸東京学— 陣内秀信 法政大学
 パネリスト 波多野純 日本工業大学
 “ 内田雄造 東洋大学
 “ 吉見俊哉 東京大学
 “ 横山泰子 法政大学
 司会 小澤弘 江戸東京博物館
 第168回 ☆水上から江戸東京をみる—一品川の水辺と宿場— 陣内秀信 法政大学
 波多野純 日本工業大学
 第169回 ☆下北沢の魅力—日本型都市再生のあり方を探る— パネリスト 小林正美 明治大学
 “ 大木雄高 ジャズ・バー Lady Jane
 “ 吉見俊哉 東京大学
 司会 陣内秀信 法政大学

2006年

- 第170回 東京エコシティー—新たなる水の都市へ— 岡本哲志 岡本哲志都市建築研究所
 ロドリック・ウィルソン 法大エコ地域デザイン研究所
 石川初 ランドスケープ・アーキテクト
 田島則行 建築家・テレデザイン
 渡辺真理 建築家・法政大学
 久野紀光 建築家・東京工業大学
 パネリスト 猪野忍 建築家・法政大学
 “ 小林博人 建築家・慶応大学
 司会 陣内秀信 法政大学

- 第 171 回 大阪くらしの今昔館—「体感する」博物館活動— 谷 直 樹 住まいのミュージアム
司会・コメンテータ 小 澤 弘 江戸東京博物館
- 第 172 回 日本の町家—京町家と卯建の意味— 大 場 修 京都府立大学
司 会 波 多 野 純 日本工業大学

2007 年

- 第 173 回 ☆杉田玄白と小塚原の仕置場— 野 尻 か お る 荒川ふるさと文化館
コメンテータ 亀 川 泰 照 荒川ふるさと文化館
司 会 土 居 浩 ものつくり大学
司 会 小 林 克 東京都写真美術館
- 第 174 回 ☆地域資料としての『近代建築』— 川 口 明 代 文京ふるさと歴史館
司 会 北 田 建 二 文京ふるさと歴史館
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
- 第 175 回 ^{みやこ みやこ} 都と京—東京と京都の人と暮らし— 酒 井 順 子 『都と京』著者
司 会 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 横 山 泰 子 法政大学
- 第 176 回 巣鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巣鴨地域— 秋 山 伸 一 豊島区立郷土資料館
司 会 成 田 涼 子 豊島区教育委員会
司 会 高 尾 善 希 東京都公文書館
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
司 会 岩 淵 令 治 国立歴史民俗博物館
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団
- 第 177 回 発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性— 谷 田 有 史 たばこと塩の博物館
司 会 毎 田 佳 奈 子 港区教育委員会
司 会 水 本 和 美 四番町歴史民俗資料館
司 会 仲 光 克 顕 中央区教育委員会
司 会 波 多 野 純 日本工業大学
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団

2008 年

- 第 178 回 チャレンジ CG プロジェクト「江戸の町並みをつくる」— 高 橋 時 市 郎 東京電機大学
司 会 勝 村 大 東京電機大学
司 会 小 澤 弘 江戸東京博物館
司 会 波 多 野 純 日本工業大学
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
- 第 179 回 幻の日本万国博覧会—月島の地域学— 増 山 一 成 中央区教育委員会
コメンテータ 伊 東 孝 日本大学
司 会 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 吉 見 俊 哉 東京大学
- 第 180 回 ☆川越のまちづくりと歴史的建造物の活用— 内 田 雄 造 東洋大学
コメンテータ 荒 牧 澄 多 NPO川越蔵の会
コメンテータ 藤 井 美 登 利 川越むかし工房
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
司 会 陣 内 秀 信 法政大学

開催案内

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年4～5回開催しています。
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL = <http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

発刊物など

研究論文・報告

- ①「江戸東京、生活空間の研究」研究所報No.14号/A4判19ページ/住宅総合研究財団/1988
- ②「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7) 研究年報No.18～24/A4判51ページ/
住宅総合研究財団/1992～1998
- ③「『江戸東京』時代の生活と政治」小木新造/A5判92ページ/住宅総合研究財団/2005.8

一般書籍

- ①「江戸東京を読む」A5判295ページ、筑摩書房、1991
- ②「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」B6判290ページ/日本放送出版協会/1995
- ③「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」B6判282ページ/日本放送出版協会/1995
- ④「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」B6判273ページ/日本放送出版協会/1996
- ⑤「江戸東京学」小木新造/A5判225ページ/都市出版/2005

記録小冊子

- ①「地域学の明日を考える」B5判59ページ/住宅総合研究財団/1999
- ②「地域雑誌からみた町」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2000
- ③「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2001
- ④「都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—」B5判44ページ/住宅総合研究財団/2002
- ⑤「江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—」B5判55ページ、カラー/
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班/住宅総合研究財団/国立科学博物館/
東京都江戸東京博物館
- ⑥「よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—」B5判42ページ/住宅総合研究財団/2005
- ⑦「東京エコシティ—新たなる水の都市へ—」B5判46ページ/住宅総合研究財団/2006
- ⑧「都と京—東京と京都の人と暮らし—」B5判40ページ/住宅総合研究財団/2007
- ⑨「地域資料としての『近代建築』」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑩「巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009

住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」の住総研ニューズレターページ

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつけられます。委員は、現在、下記の通りです。主な参加者は、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等に関心ある方で、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京の個性を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市に関心を持つ人たちが、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の基盤を持つこと、このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを考えます。

フォーラムは、企画の基本柱に基づいて立案をしています。その基本柱は、①「記憶」としての都市を考察する、②「地域研究」の掘り下げる、③環境と都市の関係を歴史的視点で考察する、④情報網の構築を江戸明治に学ぶ、の4つです。

21世紀は「都市の時代」です。全世界の人口の大半が都市に住むという、地球規模での都市化が進みつつあります。その反面、環境破壊が今日の大きな問題として浮上しました。都市景観が個性を失い、画一化していることも気になります。

そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究と、その成果の市民への還元に取り組みます。

フォーラム企画委員

委員長

陣内 秀信 法政大学デザイン工学部建築学科

委員(50音順)

小澤 弘 東京都江戸東京博物館

小林 克 財団法人東京都歴史文化財団

波多野 純 日本工業大学工学部建築学科

森まゆみ 作家/地域雑誌『谷中・根津・千駄木』発行人

横山 泰子 法政大学工学部一般教育

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環

鶯鴨の賑わいの原点をさぐる

—江戸の拡大と鶯鴨地域—

2009年3月20日発行 ©

編集 住総研江戸東京フォーラム委員会

協力 豊島区立郷土資料館

校正+DTP 有限会社 メディア・デザイン研究所

発行人 岡本宏

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel.03-3484-5381 Fax.03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

住宅総合研究財団について

当財団は1948(昭和23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期、これに憂慮した故清水康雄氏(当時清水建設社長)の提唱により、東京都の許可を得て設立された公益法人です。

現在は住生活に貢献しうる研究の委託・助成事業を中心に、住をめぐるシンポジウムやフォーラムの開催、機関誌『すまいろん』の発行等、学問と実践をつなぐ普及活動を行っています。

また、「住」に関する専門図書室を公開しています。蔵書数は書籍が約20,000冊、和雑誌が77誌、洋雑誌が11誌、学位論文が約300冊あります。江戸東京学関係図書は復刻版や古地図も含め、積極的に蒐集しています。